

刊夕日七十二

磐城毎日新聞

口本報一月六千六百
口本報一月六千六百
口本報一月六千六百
口本報一月六千六百
口本報一月六千六百
口本報一月六千六百
口本報一月六千六百
口本報一月六千六百
口本報一月六千六百
口本報一月六千六百



武藏山人に答ふ

市内一商店主

この欄で「商人風が掲載さ
れてゐるが最近商人の
二の店が武藏山人の仰せの如
く感じの良くない接客の態度
があるのは事實です、自分も
ある程度「何と申されれば」
確に体験してゐます然し「二
」の者が商人風を吹かすので
皆商人全体がそうだと云ふ様
な記事はお憤り願ひます、自
分等は小商店であるがゆゑ、
今なほお得意廻りをしてゐま
す物の注文でも配達してゐま
せうか、無いのでありません

長生きの話

松村亨

これと同じ事柄が電車でも云
へるのであつて、南米ペルー
にある百六十才の老人が或人
が長生の方法を尋ねた所がそ
の老人は手にしたパイプを
指して「煙草だ」と答へたさ
うである。その他理存の人で
名前が略するが或る者は毎朝
の梅茶を推し、或る者は毎
夜食糧水の脱洗を推して
ゐる。



新律短歌

(那山)

長谷川磨砂夫

烈風が秋をさらつて行く朝陽が
残された紅葉に映えてゐる
ラチオ体操冷たい朝風が手
や足を離らされてゐる
盛られたおそばにも故郷の匂
がする風になつて飛ん
で行き度いな
「ソアラ」と歌聲を響ける沿線
の子を忘れてゐた幼き日
が心で響く
冷たい水に故郷の温きを思ふ
雀よ昨夜のぬぐらは何處
だつたらう

異説赤穂浪士

桃川若燕

談話録連
快挙決行迫る
更に吉田忠左衛門をして軍
令を人々に授けた、人々は心
得の覺悟
一、定日相極め候はば豫て
定め候通り前日の夜中より静
かに定め置きし處へ集り申す
べき事
一、定日に至り候はば豫て
定めし時刻に打ち立つべき事
一、敵の首揚げ候時は引取
候場合に持參致すべくその敵
の上着を割きとり包み可申候
一、もし上使など御馳せつ
け候はば此首長岳寺へ持參仕
り候存念に御座候然れども
御馳せ候はば、是非に及ば
ず、御座候の御旨と打ち
掛り申候。御下知を以て彼
の屋敷へ被遣候様に御座有
る可候。其の段御指押次第
に任る可候。此上とも勝
取申候生き残り候者共呼び集
る可候。



手次翁と有之に於ては泉岳寺
へ持參仕り御墓所に供へ申す
可候。
一、子息の首級揚げ候はば
心得、一方の手負は随分成り
次第引退り候、分別要に候
然乍ら肩に掛け候ても難成首
尾候はば印を掲げ候て引取申
可候。
一、父子討取り候はば、合
圖の小箱を吹き段々吹續き總
員に知らせ可申候。
一、鐘の合圖は總人數引取
候時打申す可申候。
一、退口は裏門より引取り
申可候。

に候、申すに及ばず候得共路
々治定粉骨の働き尤も候事、
以上、右を浪士一統に讀みか
かせると共に各自持ち寄つた
吉良の動靜を呈せしめんと
ころ、彌平安兵衛が下候とな
つて仲より洩れし吉良
邸中の間取りの模様を依つて
一切を作らせた町人天野屋利
兵衛が訴人のためを召捕にな
つたといふ報知。
野金右衛門は出入りの大工棟
梁の換より手に入れた繪圖を
これに依つて吉良邸の武器を
これに依つて吉良邸の武器を
これに依つて吉良邸の武器を
これに依つて吉良邸の武器を

肉の御用命は
三三屋
牛も豚も優良品の自慢

おでん
ヤキトリ
田町末廣
トナリ
柳

ミクローゼ
健康を
生産する

ミクローゼは、酵母以
上に生存力が強靱で、
消化酵素を多量に産生
する日本固有のピルツ
(有効菌)と、アミノ酸、
ビタミンを始め各種栄
養素とを豊富に含む胃
腸強生剤であります。
故に、食慾を旺盛にし、
正確・自然な便通をも
たらし、栄養の吸収、
附加を助け、逞しい健
康を生産するのであり
ます。

東京・五反田
★**星製薬株式会社**

軍服と国民服
高島屋の洋服
御注文並に既製品
平市二丁目通
電話三六八番

神戶牛
すき焼
町田仲平
電話二五五番

吸入用酸素純度99%
關内薬局
平市四丁目
電話四〇番

味の司
トンカツの井
平市三丁目
電話一〇七番

防空暗幕
天幕シート
防水マント
カーテン
製作
敷島屋商店
平市六丁目
電話四八三番

